

『聞き書き集』⑫

平成30年3月発行

やまもと れいこ
山本 玲子 さん

昭和13年（1938年）1月7日生 80歳

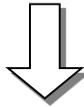
～人のために尽くして～



喜茂別町教育委員会

「聞き書き」とは？

- ◇「聞き書き」とは、人から聞いた通りに書き取った記録のことです。
- ◇「聞き手」が「話し手」の方のお宅などにおじゃまして、お話をボイスレコーダーに録音します。
- ◇寄稿文と録音からできるだけお話しされた内容や口調を生かして、話し言葉で文章にまとめます。
- ◇それを本人に、確認や修正をしてもらいます。
- ◇「聞き手」の感想や批評は一切加えていません。



- ◎その人の経験や努力から、生きる知恵を学んだり、自分のこれからの人生に活かしたりすることができるかもしれません。
- ◎その人の人生を知ることにより、理解が深まり、支え合うことの大切さや、人と交流することの楽しさを伝えてくれるかもしれません。

一 出生と樺太での幼少期

私は、昭和 13 年（1938 年）1 月 7 日に京極町で生まれました。（父 加藤嘉之助、母 ハル）

そして、昭和 15 年に 2 歳のときに家族で樺太に移住しました。あとから聞いた話では、父が商売のために樺太に行こうと決めたと書いていました。家族や親戚は反対したみたいだけど、まだ**※戦争①**が激しくなる前だったから、思い切って行ってみようとなったみたいです。



幼いころの私と母

樺太へは、父、母、2 歳上の兄と私の 4 人で渡りました。

樺太では、**※落合町②**というところに住んでいました。その後、弟が生まれて、5 人家族になって、樺太での生活が始まりました。



小学生になった私は、まちにある日本人小学校に通っていました。このころは、樺太にたくさんの日本人が住んでいて、大きなまちができていました。だから、小学校に来ている子どもはみんな日本人で言葉とかで生活に困ることはありませんでした。

でも、私が小学校2年生になったとき、それまで平和に暮らしていた生活が大きく変わりました。第2次世界大戦での日本の状況が厳しくなっていて、樺太の日本人の町にたくさんのロシア軍の兵士が入ってきました。

ロシア軍の兵士は鉄砲を持って家に入ってきました。小学2年生の私は何が起こったか判らず、体の大きなロシア人兵士が家の中に入ってくると怖くて怖くて、うちの中にあつた大きな米びつの影に隠れて震えていたことをとても今でも強く覚えています。うちだけでなく、周りの家にも来ていたみたいで、戦争中だから、なにかたくらんでいないかを見張りに来ていたみたいでした。

幸い、うちに来ていたロシア人兵士は、私たちに危害を加えたりしないで、とてもいいひとたちでした。

こんな生活が何ヶ月か続いていたんだけど、今度はアメリカ軍のB29 戦闘機が空襲をするようになってきました。

もう生活できないから日本に帰ろうってことになって、昭和22年に日本に引き上げることになりました。逃げるときは1人1枚の毛布を持たされて、家族が離れ離れにならないように、みんなで手をつないで逃げました。

途中でB29 戦闘機が襲ってきて爆撃をしていきました。そのときは、毛布を隠れ蓑みたいにして被って、爆撃が収まるのをじっと耐えていました。そして、爆撃が去るとまた走って逃げました。死ぬかもしれないし、いつになったら逃げ切れるのか

もわからなくてとにかく必死で走りました。

どのくらいの時間逃げていたのか覚えていないけれども、とてもとても長い時間を感じました。

やっとの思いで、港までたどり着いて、家族5人無事に船に乗り込むことができました。乗り込んだ船は、今のような立派な船ではないし、着の身着のまま逃げてきた私たちには食べるものもありませんでした。

船の中では小さな乾パンを20個もらいました。私が食べられるのはこの乾パンだけで、日本に帰れるかわからない不安と、空腹とで、とても心細かったのを覚えています。

どのくらいの月日がたったのかは判りませんが、やっとの思いでたどり着いたのは、岩内港だったと聞いています。

港が近づいてくると、遠くのほうに羊蹄山の頂上が見えてきて、大人たちはうれしくて船の甲板に集まって万歳三唱をできていました。私もそれを見て、助かったんだなと感じました。

岩内港についてから喜茂別に戻ってきたんだけど、今みたいに道がきれいではなかった時代だし、どうやって帰ってきたのか良く覚えていませんが、倶知安からは、比羅岡の伊藤武治さんに馬車で迎えに来てもらって、馬車の荷台に入って毛布を被って帰ってきました。

※①日中戦争

1937年（昭和12年）から1945年（昭和20年）に中華民国と日本帝国の間で行われた戦争。1939年（昭和14年）に第2次世界大戦に発展し、人類史上最大の戦争となった。

1945年（昭和20年）3月の東京大空襲、6月の沖縄戦を経て8月6日に広島、9日に長崎にアメリカ軍による原子爆弾投下があり、その後ポツダム宣言を受諾し、9月2日に降伏文書

に調印し終結した。

※②落合町

当時日本の領有下において樺太に存在した町。

樺太は、サハリン島とも呼ばれ、ユーラシア大陸の東方にある。

1915年（大正4年）6月26日に施行され、栄浜郡に所属し、豊原支庁が管轄しており、1945年（昭和20年）までは、北緯50度線を境に、南側を日本、北側をロシアが領有していた。

1949年（昭和24年）に国家行政組織法施行のため、法的に樺太庁が廃止されたことにより、同町も廃止となった。

現在は、ロシアの所属地域となっている。

一 喜茂別に移り住んで

喜茂別では、比羅岡に住むことになりました。喜茂別に住むことになった理由は、当時比羅岡には、私の母の育ての親が住んでいて、その人を頼っての移住でした。

このころの比羅岡は、たくさんの人が住んでいて、とても活気がありましたね。

家族がみんな着の身着のまま引き上げてきたので、財産も何もなくて生活に必要なものは比羅岡や留産の方々にお世話になって、何とか生活を始めることができました。

比羅岡に来てからしばらくの間は、父と母が畑の※**出面さん**③として働き、私たち兄弟は※**羊蹄小学校**④に通っていました。

この頃の喜茂別は、車とかはほとんど走っていないくて、馬車か汽車での移動でした。

中学校へ通うときは、比羅岡から中学校までの約4キロの道を友達と歩いて通っていました。道が線路の近くにあって、冬なんか歩いていると後ろからラッセル車が迫ってきて、逃げるように線路から離れました。とても怖い思いをしましたね。

比羅岡に来て間もなく、妹が2人と弟が1人生まれて8人家族になりました。何とか生活はできていたけれども、うちはとても貧しかったので、小学校には兄とすぐ下の弟だけが通って、女の私は仕事に行っている母の代わりにご飯の支度や洗濯、掃除など家の仕事をしていて、通うことができませんでした。

5年生から6年生は少しだけ学校に行くことができたんですが、遠足や修学旅行とかの学校の行事には、一切出られませんでした。



羊蹄小学校閉校式（平成10年3月22日）

妹や弟が小さいころは、母が赤ちゃんの世話で仕事ができなかったので、父はこれまで以上に家族のために仕事を頑張っていました。夏は畑の出面、冬は京極の脇方で森林伐採の仕事をしていました。でも、昭和26年ころ、ちょうど末っ子の妹が生まれたころから体調を崩していきました。

家族も増えて貧しかったので、病院に行くお金もなくて、調子が悪いのを我慢していたんですが、重症化してしまって、やっとのことで病院に行ったころには手の施しようがなくなっていました。

体調を崩してから1年もしない昭和27年3月27日に父はまだ40代の若さで亡くなってしまいました。

父が亡くなって母と、子ども6人の生活が始まりました。

そのころ私は中学1年生の終わりのころだったんですが、父が亡くなった後は、前にも増して家計が大変になったので家事に専念しなければならなくて、中学2年生に進級したころからは、学校へはほとんど行くことができませんでした。

末っ子はまだ生後8ヶ月だったので、私は、家事をしながら赤ちゃんのおなががすくと、畑の出面仕事をしている母のところまで連れて行き、お乳を飲ませて連れて帰る、そしてまた家事をするという毎日でした。

そんな生活が続いて、あっという間に中学3年生に進級していました。中学3年生になると学校ではまた修学旅行がありました。行き先は、青森や仙台など東北のほうだということでした。小学校のときに修学旅行に行けなかったので、とても行きたかったのですが、やっぱり行くことができませんでした。

家庭の事情だとわかっているだけに、行きたいということが言えず、とても悲しくて涙が出てきましたね。

でも、母に自分が泣いているところを見せて悲しませたくな

いという想いがあったので、私は押入れの中に隠れて、声を殺して泣きました。

今でも、つらい思い出のひとつです。このころは、私みたいな経験をした人たちが多かったと思います。

当時、喜茂別中学校にフクモト先生という方がいて、なかなか学校に行けなかった私のために、自転車でうちまで来てくれて何度か勉強を教えてくださいました。でも、勉強が難しくて何もわからなかった記憶があります。

結局卒業式にも出ることができなかつたんだけど、卒業証書だけはいただきました。

学校にしっかり行けなかったことで、成人してからもお友達と集まっているときに、学生時代の話題になったりしたときには、そのころの経験がほとんどないこともあって、内容についていけなくてとまどったりしましたね。

家が貧しくて、満足に勉強できなくて、知識や教養や思い出が少ないことは、大人になってからも、少し負い目に感じていました。樺太から引き揚げてきて、喜茂別に来てからも貧しい生活だったけど、負けず嫌いの私は、訳が分からないながらも努力して勉強をしましたね。でも、小さい頃の写真がほとんどないのもやっぱりさみしいね。

※③出面さん

北海道の方言で日雇いの意味。主に農業の繁忙期などにアルバイトとして雇用された人たちを指す。

※④羊蹄小学校

1908年（明治41年）に喜茂別尋常小学校付属上目名特別教授場が創設され、羊蹄国民学校を経て1947年（昭和22年）に

羊蹄小学校と改称された。平成 10 年 3 月をもって閉校となった。

— 中学校を卒業してから

中学校を卒業してからもしばらくの間は、働いている母の代わりに家事と育児をしていました。このころに、仙台にいた親戚のうちで女手がいないということで、私の面倒を見るから来てくれないかという話がありました。でも、私は自分のうちの家事や子守があったので、行けないということになり、すぐ下の弟が中学校の 1 年生のときに代わりに行ってもらいました。6 年間行ってもらっていたんだけど、弟はなれない土地で、知らない人たちに囲まれてとても苦労したようです。

このころの私たちは、貧しい生活でしたが、母の愛情に包まれて、暮らしていました。

母には、再婚の話もあったけれども、子どものためにと再婚もせず働いていて、私たち兄弟も兄を中心に仲良く生活していました。

そんななかで、弟が帰ってきて、弟の苦労した話を聞いて、母は「苦労したんだね。」と行って、弟に行ってもらったことを後悔していました。

兄弟もみんな泣いていて、どんなに生活が苦しくても、家族は離すものではないと行って弟にだけつらい思いをさせて本当にかわいそうでした。

このころ、羊蹄小学校の前に、※珪藻土⑤採掘や加工をするための※北海道温材株式会社⑥の精製工場があってそこに就職しました。16 歳のときですね。末っ子の妹は、大きくなってきて近所の人たちが面倒を見てくれるようになったので、仕事を

することができました。

このころは、比羅岡や隣の真狩村では、良質な珪藻土が採れたので、それを採ってきて、加工品の材料を作っていました。

珪藻土は、地面の中の厚い岩盤の下にあって、男の人たちがそれを掘ってきて、私たち女の従業員がそれを細かく砕いたものを専用の棚で乾燥させていました。夏になると道南の江差や松前なんかからもたくさんの女工さんが来て、とてもにぎわっていました。

珪藻土は、歯磨き粉や化粧品の材料として使われていて、今でも家の壁とかに使われていますね。

夏は、会社で働いて、冬になると珪藻土を掘ったり乾燥したりできないから、私は、倶知安に住んでいた社長の氏家忠良さんのうちで奉公（食事の支度や掃除など）をしていました。

住むところも、会社の社宅に7年くらい住まわせてもらっていて、ここには、23歳ころまで勤めていましたね。

その後、原料になる珪藻土が採れなくなってしまって、会社を閉めることになってしまったの。

会社が無くなるくらいに、当時お世話になっていた先生が倶知安にいて、その家族の方が経営していた砂利を取り扱う会社（佐藤砂利工業）で、兄が働かせてもらうことになったの。最初は、家族みんなで住むことを勧められていたんだけど、母と兄弟が住むことにして私は喜茂別の町内に引っ越して一人暮らしをはじめたの。

初めての一人暮らしだったんだけど、一人暮らしをしてからは、昼は編み物や和裁を習ったりして、夜は少しでも家計のためにと、居酒屋で働いていました。あのころの喜茂別は、たくさんお店があって、町の中にある※劇場⑦では、映画を上映したりして、とてもにぎやかだったの。

働いていた居酒屋は、その劇場の前であって、役場の内村さんの両親がやっていたの。

今では副町長さんになっているけれども、勤めていたときは、まだ小さくて、忙しいお母さんの代わりに、私が面倒を見ていたの。内村さんもそのころのことを写真とかで知っていて今でもその話をしたりするのよ。

長い期間勤めてはいなくて、私がお店をやめたあとに、向かいの劇場が取り壊しになることになって、その影響で人通りが少なくなるかも知れないということで、場所を今の郷の駅のあたりにしたんだよね。

※⑤珪藻土

珪藻土は、藻類の一種であり、海や湖沼で珪藻が大量繁殖するとその死骸は水底に沈殿する。死骸のなかの有機物が分解されると、二酸化ケイ素を主成分とする殻のみが残る。

珪藻土は、水分や油分を大量に保持することができ、かつ、耐火性と断熱性に優れており、電気を通さない絶縁体として、また、適度な硬さがあることから用途が広く、土壌改良剤や、建材、研磨剤として幅広く利用されている。

また、アイヌ民族は珪藻土を「チ・エ・トイ」（我ら食べる土）と呼び、食料としても使用されていた。

明治末期に、この言い伝えを聞いた上目名特別教授所（後の羊蹄小学校）の酒井教諭が調査を行い、比羅岡地区に珪藻土があることを発見した。

※⑥北海道温材株式会社

比羅岡地区にある珪藻土に着目した氏家敬次氏により珪藻土の採掘事業が始まり、その後、日本シリコンセル工業株式会

社が継承し、1938年（昭和13年）に東京温材株式会社北海道工場となり、1944年（昭和19年）に独立して北海道温材株式会社（社長 氏家忠良氏）となった。旧羊蹄小学校前に精製工場があり、最盛期には、年産500トン、従業員35人、社宅12～13戸を数えた。

※⑦劇場

1930年（昭和5年）に喜茂別町市街に日向貞義氏（東倶知安）により本格的な劇場が誕生しその後、火事による焼失や喜茂別魚菜市場建物の買収及び改修による営業の再開をしていたが、1948年（昭和23年）5月に発生した喜茂別大火により全焼した。1952年（昭和27年）に阿部喜春氏により営林署喜茂別駐在所裏手に喜茂別劇場が創業し、本格的にテレビが普及するまで本町における最大の娯楽施設として町民に親しまれた。

一 ご主人との出会い・富士見自動車工業開業

居酒屋さんで働いていたときに、後の旦那さんになる山本武さんがお客さんで来ていて知り合ったんだよね。そのあと、縁あって昭和37年24歳のときに結婚しました。

主人の実家は双葉で、豆腐屋を経営していました。主人の母は、朝早く起きて豆腐作りに忙しい日々でしたね。

私も食事の支度や豆腐作りもお手伝いしましたね。油揚げを揚げるのを任されたけれども、油の温度など難しかったですね。

作り立ての豆腐や揚げたての油揚げとかを食べたときの感動は今でも忘れることができないくらいにおいしかったのを覚えています。

豆腐作りは大変難しくて、「ニガリ」の混ぜ合わせ方や量で味が変わると母は言っていましたね。山本家の豆腐は評判が良く、働きに来ていた若い人たちにもよく食べさせていましたね。双葉に来て揚げたての油揚げを食べるのが楽しみだといって寄っていたんだよ。

お義父さんは、リヤカーで作りたての豆腐や油揚げ、オカラなどを持って愛地（現伊達市大滝区愛地）まで売りに行っていたと聞いています。

大晦日になると兄弟が皆集まって実家で年越しをするの。それぞれの子どもたちも小さかったのでとても賑やかでしたね。

その後、実家で半年くらいお世話になって、町内に出て新生活が始まりました。

それから1年位して長女が生まれました。

結婚したころの喜茂別は、ようやく車が街中を走り出して、車の修理とかが増えると考えて主人は何人かの方と喜茂別自動車工業を立ち上げたんだよね。

ここには、3年くらい勤めていたんだけど、そのときに、主人は車検の検査員の資格を取ったの。まだそのころは、車検の検査員は少なかったから倶知安の共栄自動車からもお願いされて、5、6年くらい掛け持ちで仕事をしていたの。

整備の仕事に関連してたくさんお客さんがいたから、営業の仕事もしていたね。

そして、独立して今の**※富士見自動車工業⑧**を設立しました。

会社の名前になっている「富士見」は、主人が喜茂別から見る羊蹄山が好きで、羊蹄山は蝦夷富士とも呼ばれているから、「富士の見える会社」ということで、命名したの。

会社を建てる時、ちょうど昔の喜茂別中学校が取り壊されるときで、使わなくなった廃材をもらってきて頑丈な工場がで

きたの。いまでも現役なんだよ。

富士見自動車工場では、主人と二人三脚で一生懸命働いたの。

私も、工場に出て、主人に教えてもらいながら※板金塗装⑨の仕事をしたの。パテを塗ったり、塗装をしたりしてね。はじめは大変だったけど、だんだん慣れてきてね。とてもうまかったのよ。

私は、工場の仕事のほかにも事務所で請求書などを書く事務をしたり、集金をしていました。主人は仕事のみの人でしたね。

景気もだいぶ良くなってきたころだったから、仕事もたくさんあったんだよ。

主人は仕事のほかに、旭町の町内会長などを長年歴任していたんです。今から30年くらい前だったんですけど、夏祭りが8月14日、15日にあってその前の12日から13日に旭町の盆踊りをやっていて、トラックで町内を回っているところまで踊る踊り山をやっていましたね。町内会の子どもたちもたくさんいたので、踊り山に参加する子どもたちに私が教えていましたよ。



結婚 25 周年記念の旅行にて

あと、主人はそばうちが好きで、町内会で「蕎麦愛好会」を立ち上げて、定期的にそばうちや会報紙を発行していました。

月1回うちに集まって蕎麦会をひらくと、家族連れや当時喜茂別町にいた学校の先生などたくさんの参加があって、子どもたちも喜んで走り回って大人たちも楽しくそばを打って、とてもにぎやかで楽しい会でしたね。

そば打ちのほかに、それぞれボトルをキープして、好きなものを飲んで、ゲームやカラオケなどして楽しい思い出のひとつコマでしたね。

7～8年続いたのですが、主人が亡くなり、平成2年で解散してしまいました。

そのころ、子宝にも恵まれて、私は、子どもには、絶対にしてあげたいと思っていたことがありました。

私は、先ほども言ったとおり、小さいころに戦争を体験して、命からがらにげ家が貧しくて、兄弟の世話や家事をしなければならなくて、そのせいで学校にも行けず、つらい思いをしているので、子どもたちには学校に行って、しっかり勉強をして手に職をつけてもらいたいと思っていました。

だから、子どもたちの教育については、とても厳しかったと思いますね。

おかげさまで子どもたちも、頑張って勉強してくれて、長女は大学を卒業して保育士、長男は主人と同じ自動車整備士、次女は看護師とそれぞれ資格をとってくれました。



※⑧富士見自動車工業

昭和44年、山本武氏が開業した自動車整備会社。

山本武氏が亡くなった後は、山本玲子氏が代表となり、整備業務は長男浩一氏が行っている。

※⑨板金塗装

ここでの板金塗装とは、車が事故などでへこんだり傷ついたりしたものを整形し、パテ（建築や模型製作で用いる材料）と併せることにより、仕上がりをよりなめらかにすることができる。

その後、塗装を施し、へこみ、傷がつく前の状態に再生する。



長女と母



家族みんな

一 ご主人を亡くして

平成2年12月に主人が53歳で亡くなりました。

ちょうどそのころは、町議会議員もしていて、4年任期の4

年目だったと思います。

※ライオンズクラブ⑩にも入っていて、その日は、忘年会があったんだけど、夫婦で参加する予定で支度をしていたの。支度ができた主人が先に1階の事務所に下りて行ったところまでは見て、私も火の元を確認したりして準備できたので、降りていったんです。そしたら、事務所のソファで大きないびきをかいて眠っているように倒れていました。今までに見たことのない主人の様子だったので、急いで救急車を呼んだの。

病院に運んだんだけどあつという間に亡くなってしまいました。原因は脳内出血というもので、大きな往復いびきが特徴的な症状だということでした。

救急車に乗っているときは、ついさっきまで、普通に会話していたのにどうしてこんなことになるんだろうという不安な気持ちと、救急車のけたたましいサイレンの音が今でも耳に残っています。

主人が倒れたとき、子どもたちはみんな仕事や学校で本州に住んでいたんです。だから、急いで帰ってくるように連絡したんだけど、亡くなる時に立ち会えたのは息子だけでしたね。

ちょうどこの年に静岡にいた長女のところに初孫が生まれて、正月休みに会いに行こうねって話をしていた矢先の出来事だったので、主人に初孫を見ることができずに逝ってしまったことが今でも悔やまれますね。



山本武氏町議会議員
出馬のころ

※⑩ライオンズクラブ

ライオンズクラブは、社会奉仕団体「ライオンズクラブ国際協会」に所属する単位クラブであり、1914年（大正3年）6月7日にアメリカ・シカゴで設立された。異業種が集まり、幅広い奉仕活動を実践している。



ライオンズクラブ記念品

— 富士見自工再出発と息子（浩一さん）のこと

主人がなくなってからは、親戚や関係者、長男が集まって、これからについて話し合いをしました。私は、主人がいなくなってしまったので、二人でつくってきた富士見自動車工業は続けていこうという気になれなくて、廃業しようと思っていました。それをみんなに伝えたんだけど、長男は、喜茂別に戻って跡を継ぐって言うてくれて、親戚の人たちも息子がやりたいって言うているんだから会社はなくさないほうがいいとなって。会社は続けることになったの。

会社は続けることになって、長男も資格は持っていて喜茂別に戻ってきてくれたんだけど、商売の厳しさは、私が一番知っていたから、息子は主人と一緒に仕事をしていなかったの、主人の代からうちを使ってくれていたお客さんがまた来てくれるだろうか、しっかりお客さんの要望にこたえられるのだろうかととても不安な中での再スタートでした。

私は、主人と仕事をしていたときには板金塗装をしていたので、手伝うつもりでいたけれども、息子は私の年齢を考えて、無理させないと気を遣ってくれたみたいで、従業員ともくもくと仕事をしていました。でも、仕事の中には事故や故障で動かせなくなった車をレッカー移動するものもあって、夜中や朝早く時間を問わずに連絡が来るのがほとんどだったので、運転中寝てしまわないようにとか、急いで現場に行くために無理な運転をしないように、私も助手席に乗ってついていっていましたね。それも、しばらくしたら、大丈夫だよって言って、一人で行くようになりましたけどね。

今では、すっかり頼りになる整備士として働いていますね。

商売は信用が第一です。息子は、高校から札幌で暮らしていたので、町の人たちの顔もよくわかりません。そこで、息子の顔を知ってもらうため、いろいろな会に入れてもらい、皆さんに息子を教育してもらったようなものですね。

人を使っていた頃もあったのですが、若い人は、札幌にあこがれて行ってしまい息子は大変だったと思います。

引き継いだころは、塗装の色あわせなんか難しくて苦労するかなと思ったけれども、さすが現代の若者ですね。何の心配もなくやっけてのけていました。

息子も、結婚をして、今では4人の子どもにも恵まれ、良きパパをしているのを見て感心しています。そのほかに、外孫が5人いて、合わせて9人の孫に恵まれました。

内孫の長女は昨年、静岡の大学に、今年からは次女が青森の大学にと離れ離れになり、だんだんさみしくなりました。

娘の子どもも台湾の大学に行くなど遠くなってしまい、私の年代では考えられないことばかりですが、現代人なのかと思います。

一 私の趣味

私の趣味は、今でも続けている舞踊や絵手紙、※梅花講⑪です。

荻野さんともいろんなことを一緒にしてきたので聞き書き見ていたらとても懐かしかったですね。

※あやめ会⑫は、3人の子どもたちに恵まれ、生活にも少し余裕ができてきたころでしょうかね。当時、婦人団体連絡協議会の会長をしていた大町の山本ミツエさんとお逢いして、「これからの時代は、若い貴女たちが、婦人部に入って活躍しなければいけないんだよ」と言われて、婦人部に入会して、山麓の研修会や後志女性大会など可能な限り出席して、広く知識を学ぼうと勉強しました。

昭和 56 年当時商工婦人部の副部長を高橋和子さんと努めていて、踊りの会も発足して、町を盛り上げるために千人踊りの話が持ち上がり、一般夫人の協力を得て積極的に講習会を行って、開催しました。5～6年続いたかと思います。

千人踊りといっても、人口が少ないから 150 人くらいで町を練り踊りましたが、沿道にはたくさんの見物人でいっぱいでしたね。

夏祭りも、昔は「産業まつり」って言って市街地でやっていたんだよ。

当時はあやめ会の会員も 20 数名いて賑やかでしたね。

今やあやめ会も小人数になってしまいましたが、そのころは、あやめ会は街のシンボリックな存在で輝いていて素晴らしい会でしたね。

現在は、札幌に講習にも行き、3年に一度北海道大会にも出席し、踊りの輪を広げることも去ることながら、人の輪を大切

に趣味を通じて自分を磨く最良の場ですね。

平成 15 年には、日本民謡舞踊連盟の講習会を受けて、公認講師の資格も取らせていただきましたよ。

あやめ会活動の様子



千人踊り

公認講師認許証

認許証
山本玲子殿
日本民謡舞踊連盟
公認講師

当連盟入会積年に及び研究練習後進の
指導に精励し会員相互の人格技芸の高
揚に寄与する等々公認講師の通り
公認講師たる事を認許致します
平成二十三年五月五日

日本民謡舞踊連盟会長 中屋小しほ

ボランティア※しらかば会⑬も今年で 38 年を迎えます。

私が会長を受けてから早 12 年の月日が流れました。はじめは、私にこのような大きな役ができるかと不安でしたが、会員の皆さんに支えられて、皆が力を合わせるとどんな大きな事業でもやり遂げることができるということと、皆おなじ目的に進んでいる時は、楽しいということも味わうことができました。

私はまだ、勉強してゆかなければならないことがたくさんありますが、先輩の残してくださったものをさらに充実させて深みのあるものに進めていきたいですね。

高齢化が進んで今は、毎月 100 食以上のお弁当を作っていて、独居老人の方々には喜んでいただいています。腕を振るい、「おいしかったよ。」と言ってもらえると、また頑張ろうと思えますね。

他には、夏祭りや社会福祉協議会のお祭りでは、そばやうどんを出したり、※きもべつ WAO⑭でやっているシーニックナイトとかのイベントでは豚汁つくって提供していますね。おいしいって言ってもらえるとうれしいですし、励みにもなりますね。

食事を作ったりするのも楽しいし、他にもっと活動できたら素晴らしいかなと思っています。たとえば町内の清掃活動とか町のためになることもできたらいいかなと思っています。

他には、加工品グループで、「きらめきみそ」っていう名前のお味噌を作って販売したり、昭和 62 年からは、※交通安全指導員⑮もやっています。

※⑪梅花講

梅花流詠賛歌（ばいかりゅうえいさんか）は、いわゆる仏教の讚美歌であり、曹洞宗の作法でお釈迦様や歴史のなかの祖師

を称え、先祖や亡き人を偲ぶ際に詠唱する。

※⑫あやめ会

昭和 56 年に喜茂別町商工会婦人部員の踊り同好の者が集まり、「舞踊サークルあやめ会」を発足した。習得した舞踊の公演は、町内の各種行事にとどまらず、昭和 60 年ころには、クラウンレコード舞踊まつりへの参加など多岐にわたる。

また、平成 2 年に発足した、「後志舞踊の会」にも参画し、舞踊を通じた芸能文化の振興・発展に寄与している。

現在会員 6 名で山本氏が会長を務める。

※⑬しらかば会

昭和 56 年発足。町内の独居老人等へ毎月 1 回食事の提供する福祉活動を行ったり、町の行事等でおいしい豚汁などを提供している。

※⑭きもべつ WAO

町内にある特定非営利法人で平成 19 年 4 月に設立し、シーニックナイトはじめとした町内各種イベントの主催や協力、福祉、交通安全等の活動を行っている。設立以前も任意団体として活動している。

代表者は山本浩一氏、会員は 12 名。

※⑮交通安全指導員

学校や保育所、幼稚園など、園児・児童に足して交通安全教育を行ったり、交通指導を行う職員である。

都道府県または市町村からの委嘱を受ける非常勤の特別地方公務員である。



寿のつかい



お元氣でお過ごしでしょうか。

私たち、ボランティア『しらかほ会』では、毎月1回訪問させていただきます。

ささやかですが、私たちの気持ちをとお届け下さいます。

このつぎは、11月20日に訪問いたしますので、お元氣でお過ごしください。

一ロメモ

今日のがほちゃ(スびす): 喜ば別産 旬: 9月~10月

今日の『がほちゃの肉まんフライ』と『がほちゃのこぼれんぼろ』は
 喜ば別産(食塩不使用、木村)のレシピを考えました。
 がほちゃは食塩不使用の肉まん、食塩不使用を避ける働きが効の肉まん
 同時に肉まんも作ります。さくら豆腐(ビタミンA) 厚揚げ(食塩不使用)、ビタ
 ミンB1、B2、C、カルシウム、鉄などをバランスよく含んだ栄養満ち
 すぐれた野菜です。体も心も元氣なため、これからの季節に打っ
 て付けです!!

ボランティア『しらかほ会』会員一同



たくさんの場面で活躍しています

一 挑戦の日々

小さいころから、休みなく家事や仕事、趣味の時間、ボランティアをやってきたから、私は、今でもじっとしているのが苦手で、自分で興味を持ったものや新しいことに挑戦するのが好きですね。

たとえば、次女が高校卒業すると同時に当時 49 歳（昭和 62 年ころ）の時に、自動車の運転免許を取りに行きました。それまでは、自分で運転できないことに不便を感じてはいなかったんだけど、母親がそのころ留寿都村の施設に入居することになったので、様子を見に行ったり、差し入れを届けたりするための移動手段として免許を取りに行きました。

周りの人たちからは、50 歳にもなる今から免許とりに行くのは難しいんじゃないかって反対されたんだけど、1ヶ月くらいで集中して免許を取ることができましたね。

主人も免許をとることに反対していたのに、いざ免許をとったら、「札幌まで部品取りに行ってくれ」だって。

まだあのころは、今より若かったし、体力もあったから免許とりに行こうと思えたとし、仕事で札幌まで運転できたんだね。

運転歴は 30 年以上だよ。

自動車学校の先生にも「山本さん、よく取れたね」って言ってもらえて、自分でも感心したよ。

あと、主人が亡くなったあとに、少しでも生活の糧になればと、居酒屋を 10 年くらいやっていましたね。主人の好きな「富士見」からとってお店の名前は「ふじ美」と名づけました。

小さいころから炊事をしたり、居酒屋で働いていたり食事を作ったりするのは慣れていたので、その経験が活きたのかなと思います。



酒処「ふじ美」時代

あと、65歳を過ぎたころから、夏野菜づくりに目覚め、栄の高橋文夫さんにお世話になりながら、キュウリ、ナス、ピーマン、トマト、白菜、キャベツ、トウキビなどを作り楽しんでいきます。

太陽の光をたっぷり浴びた夏野菜をたくさん食べて健康な体で過ごし、なかでも我が家ではトマトが大好きになりました。

自然の恵みとはありがたいもので、採れたての野菜は格別ですね、お友達にもおすそ分けして喜ばれていますよ。

他には、山菜料理が好きなので、春になるのが待ち遠しくて、じっとしてられなくなりますね。

クレソンやヤチブキとかを採ってきて食べた時の味は格別で自然の恵みを感じますね。

山には、時々孫を連れて行って、自然体験を通して安全な食や健康について少しでも考えてもらえればと思っています。

主人は、若いころから「人間は、世のため人のために尽くすものだ」というのが口癖でしたね。だから、いろんな役職を引き受けて、自分の時間を周りの人のために使っていて、ゆっ

くり家族との時間を過ごすことも少なかったよ。

お盆でも、町内会の行事とかやっていたから、実家の墓参りなんかもほとんどいけなかったね。

その気持ちは主人が亡くなった後も、子どもたちにも受け継がれているのかな。長男もいろいろやっているものね。

人に尽くすことは、自分を磨くためのものでもあると思います。ですから、まだまだいろんなことに挑戦してみたいと今でも思っています。



家族に囲まれて喜寿のお祝い

— これから

この前の誕生日で、80歳になりました。樺太から引き上げてきて70年くらいになりますが、喜茂別もだいぶ変わりましたね。人も少なくなってきましたし、お店もだいぶ減ってしまいました。でも、私も歳はとりましたが、自分の体は動くうちは子どもたちに負担にならないように健康に気をつけていきたいですね。

舞踊やボランティア活動もできる限り、続けていきたいと思うし、やっぱり主人に言われた「人のために尽くす」というのは一生続けたいですね。



聞きとりの様子

